みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴル風物誌：ことわざに文化を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4580

エピローグ

一九八七年十二月から一九八八年九月まで、わたしは文部省在外研究の費用をえて、中国内蒙古社会科学院に留学していた。その間、各地の牧民をたずねて草原のくらしを知る一方、町ではもっぱら朝から晩までひたすらモンゴル語の本をよんだ。ひとたび学生生活に終止符をうったあとの留学だったから、家事も仕事も放棄して学生にもどれるということがなによりもうれしい生活だった。

社会科学院では、とりあえず歴史研究所の留学生としてうけいれられ、歴史学者のジョルンガ教授の指導のもとでなんらかのテキストを講読してゆくことになった。まず、民族学の研究をこころざすわたしのために、なにかふさわしいテキストを選定しなければならない。教授と相談した結果、《ことわざ集》がよいだろうということになった。いくつかのことわざ集を比較検討して、もっとも総合的なものとして、Mongol kelen-u öbermice kelelege-yin tobci toli（『簡明蒙語成語詞典』モンゴル文、一九八一年、内蒙古教育出版社）がえらばれた。

このことわざ集には、一句ごとに解説が付されているから、ことばさえわかれば、本人がよみすすめることによって、内容はおのずと理解されよう。しかし、いくら解説が付されていても、ただちに内容が理解できるわけではない。そこにこそ、ことばの壁ではなくて文化の壁がある。この壁をのりこえるためには、やはりどうしてもモンゴル人の的確なアドバイスが必要となる。

ジョルンガ先生は、明代蒙古史とりわけアルタン・ハーン伝の研究を専門としている方なので、わたし相手ではその専門性をいかすこともできず、先生にとってのわたしは不十分な学徒であったにちがいない。しかし、わたしにとっては、文化の壁をよじのぼるのに願ってもない助言者であった。先生は、モンゴル語のほかに漢語に精通していらっしゃるばかりでなく、日本語を自在にあやつることができ、しかも、日本語の微妙なニュアンスの差異に心をくだくという精密な分析眼のもち主だったからである。本書の刊行にあたってあらためて、ジョルンガ先生の細やかな御指導に対してお礼を申し上げたい。

十ヶ月の留学のあいまにあちこち見学にでかけながら、一週間に二回というペースで講義をつづけて、ちょうど留学期間がおわるころにこの一冊を読み終えた。そのときの翻訳原稿は、帰国後さらに多少の補筆修正をくわえ、現在、国立民族学博物館のコンピューターにデータベースとして記録保存されている。一五七一件のことわざを多角的に検索することができる。本書はこれらのことわざを分類整理し、重要な二三九件をとりあげて紹介したものである。もとのデータベースは、一般公開されないものの、研究目的で利用することは可能なので、ぜひ多くの方に利用していただきたいと思う。

留学中の一つのまとまった仕事だから、ぜひ活字にしてより一般的に公開したいというわたしの願いは、本書のような美しい体裁となって実現した。本書の企画から編集まで一貫して、わたしの願いをうけとめてくださった東京書籍の新井正光氏に、心から感謝する次第である。

せっかくの指導をうけたものだから、なんらかの形でまとめておかなければならないという責務をずっと感じつづけてきた。そのためだろう。いまは、願いがかなったという喜びと同時に、肩の荷をおろしたという安堵も感じている。いやいや、まだ安堵感にひたってはいけないのかもしれない。ことわざの楽しみをより深く理解し、そこからモンゴルの精神風土をより鋭くよみとくためには、あつかわれている素材ごとにグルーピングするばかりでなく、表現されている概念ごとに把握する必要もあろう。その仕事をいつかはたすまで、安堵はおあずけにしておこう。

一九九二年三月　　著者

追記

本書を脱稿後、亜細亜大学教授鯉渕信一氏の『騎馬民族の心――モンゴルの草原から』（NHKブックス）を得ました。そこにもたくさんのことわざが紹介されており、いくつか本書でとりあげたものと重なっています。モンゴルのことわざに興味のある方は、ぜひ右の書もあわせてお読みください。